



# 青年心理学方法論

西平直喜 著



有斐閣

## 著者紹介

にし ひら なお き  
西 平 直 喜

1926年 東京に生まれる

1950年 東京文理科大学心理学科卒

現在 山梨大学教授，教育学博士

著書 『青年分析』大日本図書，1964年

『青年心理学』共立出版，1973年

『友情・恋愛の探究』大日本図書，  
1981年

『幼い日々にきいた心の詩』有斐  
閣，1981年

『子どもが世界に出会う日』有斐  
閣，1981年



## 青年心理学方法論

昭和58年6月5日 初版第1刷印刷

昭和58年6月15日 初版第1刷発行

定価 5,000 円

著 者 西 平 直 喜

発行者 江 草 忠 允

発行所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2～17

電話 東京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

京都支店 [606] 左京区 田中 門前町 44

印刷 株式会社精興社・製本 高陽堂製本

© 1983. 西平直喜. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-07466-6

## は し が き

本論稿は筆者が、二十数年間、取り組んできた青年心理学研究のささやかな集大成である。シュブランガーの了解心理学的青年心理学をなんとか超えたいと悪戦苦闘してみたが、気がついてみれば、巨峰はなお雲のかなたに聳えているというのが偽らざる実感である。

シュブランガーがあれほど深く青年心理に迫りえたのは、方法論的立場の堅固さによるといえるであろう。しかし、その堅固さが世界の「青年心理学」から古いと批判され無視され、古典としてだけ読まれるに至った原因でもあった。それというのも、シュブランガーは、一般心理学的知見も取り入れず、統計的方法はまったく顧みようとせず、文化人類学や社会心理学の成果も使おうとせず、精神分析に対しても、頑くなに拒否するといった、いわば諸科学に対して自閉的な姿勢をとったからである。このため、シュブランガーの方法は〈名人芸〉であって、万人の使いうる科学の方法ではないという批判を受けるに至っている。

しかし、青年心理学が児童心理学や社会心理学と同じ研究法を用いようとしたとき、青年のもつ独特の心理的特性が埋れてしまうことも、多くの刊行書が示している。問題は、シュブランガーの「了解」の方法を、発達した諸科学に対してどう〈開いた〉ものにするかであり、了解的方法を現実の青年把握に有効な技法にまで具体化するために、どのような方法論的吟味が必要なのかである。

筆者は、了解心理学を、弁証法的理論や現象学的解釈学との関連の中で見なおし、ここから派生する調査法・行動の要因連関図・指導法としての「問い」・<sup>パーソナル・ドキュメント</sup>個人的記録分析法などの諸研究技法について発表し、この「シュブランガーの了解を開いた姿勢にする」という課題と取り組んだ報告書としたい。

これらの論稿の一つ一つは、あらかじめ体系的構想があって選ばれたものではなく、その都度の関心や興味によって任意にテーマを決め研究技法も使ってみたというのが実状である。ただ、数年前から、これらの成果を自分なりにまとめ、できるなら一つの体系化を試みたいと願いはじめ、いくぶん研究領域の計画的な

選択や、方法論の自覚的な吟味を企図するようになり、このような体裁を整えるに至った。論文はすべて、筆者自身の調査研究であるが、第3章5節の「現代青年の人生への構え」のみは、筆者を代表とする5人の共同研究の成果であることをお断りしておきたい。

本書はもともと学位論文として九州大学に提出したものであり、既に7年以前にはほぼ形を整えていた。その意味では著者自身の関心も研究領域も、かなり推移しており、手を加えたい点もいくつかあるが、それはまた他日を期することとし、ほぼそのままの形で出版することにした。ことに前半の数量化論文には、書いてから20年を経たものもあり、この面の才能の乏しさもあって、とても自信のもてるものではないが、一人の研究者の内面的発達史の資料という意味でも、あえて省かなかった。

青年心理学の方法論は、問いなおし問いなおしされて、次第に洗練されたものになりつつあるが、本書がその学説史の1ページになりうるなら、望外の幸せである。

最後に、将来青年心理学を専攻しようと期している若い院生や研究者のために、大きな回り道をしてきた著者として一言申しあげたい。「現象学や解釈学、存在論や倫理学の基礎的文獻に親しまれるように」。私の頭の中には、ハイデッガー、サルトル、シェーラー、ジェームズ、西田幾多郎、和辻哲郎などの諸著作が浮かんでいるのであるが、まさに古典と呼ばれる基礎的文獻を、早い時期から読み、身につけるように、強くお奨めしたい。

なお、本書の組版は、中国図書進出口総公司上海印刷廠の手をわずらわした。日中国交正常化10周年を契機として国際組版交易株式会社が創設されたことによるとのこと。その第1回目の組版と聞いて嬉しく思うと同時に会社の今後の発展を祈りたい。また、一般向けでないこの種の「固い」本書の出版にご尽力頂いた有斐閣編集部の方々に、厚く感謝の意を表します。

1983年初夏

西平直喜

## 目 次

|     |                               |     |
|-----|-------------------------------|-----|
| 第1章 | 青年心理学の方法論的序説                  | 1   |
| 第1節 | 青年心理学の科学性と方法論                 | 1   |
| 第2節 | 青年心理学の研究技法                    | 14  |
| 第2章 | 量化と統計的方法に関する様々の<br>試みとその限界Ⅰ   | 27  |
| 第1節 | 青年期の家庭におけるフラストレーション           | 27  |
| 第2節 | 基本的対人態度の形成と両親の影響              | 43  |
| 第3節 | 態度測定 FMS の因子分析的研究             | 54  |
| 第3章 | 量化と統計的方法に関する様々の<br>試みとその限界Ⅱ   | 69  |
| 第1節 | 現代青年の「人生に対する構え」の因<br>子分析的研究   | 69  |
| 第2節 | 青年期「アイデンティティ」の操作<br>的定義と測定    | 98  |
| 第3節 | 青年心理学における「実証」と「説得」            | 111 |
| 第4章 | 社会学的・社会心理学的方法                 | 127 |
| 第1節 | 場理論に基づく「青年の生活空間」の記述           | 127 |
| 第2節 | 青年個人の行動を生活空間から図示する試み          | 141 |
| 第3節 | 青年集団の心理的特性をモンタージュ法<br>で図示する試み | 155 |

|     |                      |     |
|-----|----------------------|-----|
| 第5章 | 臨床的・現象学的方法           | 169 |
| 第1節 | 青年分析の技法的研究           | 169 |
| 第2節 | 現象学の心理学              | 180 |
| 第6章 | 伝記分析的方法 そのⅠ          | 189 |
| 第1節 | 個別分析的手法              | 189 |
| 第2節 | 比較伝記的手法              | 209 |
| 第7章 | 伝記分析的方法 そのⅡ          | 227 |
| 第1節 | 主題分析的手法              | 227 |
| 第2節 | 精神発達的手法              | 244 |
| 第8章 | 結 び：青年心理学体系化の試み      | 263 |
| 第1節 | 了解心理学的方法の発展方向        |     |
|     | ——青年心理学における「了解」と「会得」 | 263 |
| 第2節 | 要旨と結論——10の基本命題       | 280 |

# 第 1 章 青年心理学の方法論序説

## 第 1 節 青年心理学の科学性と方法論

### Ⅰ はしがき——青年心理学の科学性

青年心理学の対象である「青年心理」は、パーソナリティ理論や宗教心理学や社会心理学の対象と同様に、きわめて全体的、有機的、弁証法的、意味的であって、児童心理学でとった各機能に分解し、その総合として子どもの心をとらえる自然科学に準じた方法が不適當であったことは過去の歴史が示している。

青年心理学のもっとも重要な点は、「青年心理学でいうところの科学性とは何か」を明確にすることであって、一般心理学はもちろん、児童心理学とさえ連続的に考えてはならず、したがって、追求する科学性も、客観性、再現性、実証性、法則性、予言性のどの特質においても独特のものがあるということである。といっても、心理学の中で青年心理学だけ特別の方法論をもつとは考えられない。結論的にいえば、社会科学と人文科学の方法を総合的に取り入れるということであり、このことはマレー (Murray, H. A.) のいうセントラリスト (centralist) の立場、オールポート (Allport, G. W.) のいう個性記述的 (idiographic) な立場、さらにシュブランガー (Spranger, E.) の了解 (Verstehen) の立場を青年心理学の中に明確に位置づけることであるといえる。

筆者は数年前に、これらを「ダイナミック」としてとらえようと努め<sup>[1]</sup>、更に弁証法理論にしぼって総括したが、この際に弁証法理論のカテゴリー論を十分に使いこなすことができず、試論としてもはなはだ意にみたぬものに終わっている<sup>[3,4,5]</sup>。

青年心理学の発展にとって現在もっとも緊急なことは、方法論 (研究方法、技術ではない) を確立することであり、理論的水準を高めることだという確信は変わ

っていないどころか、ますます強まっている。この小論は、与えられた「青年の心理学的特性の形成機構」という課題を、方法論的に追求したものである。

## 2 「特質」の解明に用いられるカテゴリー論

### (1) 青年心理学における三つの問い

青年心理学は次の三つの根本的な問いによって3分野に大別され、漸次統合されていくべきものと考えられる。

#### (a) 「青年期とはどういう発達の時期なのか」

この問いによって「児童期が青年期へ移行し青年期が成人期に移行する発達過程の特質は何か」「青年期の特徴となる心理学的特性は何か」「どのような発達法則によって動かされるのか」などが発達心理学的に問われるのである。

従来の青年心理学は、そのほとんどが、この心身の機能の発達という立場からとらえられているものであり、発達の一過程を対象とする心理学の一領域とされたのである。

この問題を方法論的にとらえるためには、根本矛盾の変動にともなう発達過程の変動としてとらえることがもっとも理解しやすい。しかもここで働いている発達の法則は、個人の体力、記憶力、抽象力、社会性、理想など一切を含む内的な発達する力〈生活力〉と、行動様式、言語様式、言語表現、対人関係、生活型、世界観にあらわれる生活空間の枠組〈生活関係〉との照応関係である。

もちろん、これは、唯物史観でいう「生産力と生産関係の照応」という基本テーゼの適用ではあるが、機能と構造という形や、社会と文化、社会構造と心理構造などの形で、ジンメル (Simmel, G.), ミルズ (Mills, C. W.), ボーソール (Bouthoul, G.) 等の理論にも入りこんでいる考え方である。

青年心理学の中で一例を示せば、児童期の〈生活力〉にふさわしいギャングの集団という〈生活関係〉は、まもなく青年期の自我感情の発達や興味の分化、個性化などの〈生活力〉の発展によって崩壊され、新しい青年的友人集団を形成させていく動きの中にはっきり出ているであろう。

「青年期の心理学的特性は何か」という問いに答える場合、当然、あらゆる観察・資料による現象の分析から本質をとらえようとする認識が働き、「現象と本質」〔4,5〕というカテゴリーが支配的に作用する。

いうまでもなく、本質は現象として初めてとらえられるし、この発現の構造を理解することによって「青年心理」という客観的实在の全体をとらえることができる。

青年の言動を観察し調査して、「第2伸長期と第2次性徴の発現、心理的離乳によって社会の中で周辺人的存在となる。特権の少ない集団の特性をあらわす」「内向化を深め自我同一性が混乱し確立される」「対立的思考が始まる」「自我の発見と自己表現、社会意識の拡大と職業選択、異性への関心と結婚への内的準備、価値観が生じ、人生観や世界観を形成する」などの特質を抽象することができる。これらは、ホール(Hall, G. S.)(10)やシュブランガー(16)以降の全青年心理学の成果である。

さて、この特質をあらわす概念は、実は生理学的だったり、場理論的だったり、社会学的だったり、了解的であったり、自我心理学的であったりする。現在の青年心理学の科学性の弱点は実にこのような統一的立場を欠いた折衷主義的な構えにあるのである。

では、前述の「生活力と生活関係の照応」という原理からもたらされる青年心理の特質はどのように表現されるべきであろうか。

- ①身体の成熟(生活力)による矛盾の激化と不安定性の増大(生活関係),
- ②社会的地位の変動による矛盾の激化と不安定性の増大,
- ③自我感情の昂揚による内的矛盾の激化と自我の再構成,
- ④時間的展望の分化拡大による可能性と現実性の矛盾の激化(2),

とし、いずれも生活力の発達にともなう古い生活関係の混乱・分裂と新しい生活関係の創造という、青年心理全体の動きを述べている。青年心理学で全体というとき、全体とは青年の全生活空間を意味している。全生活空間はここにいる生活力と生活関係の統一として形づくられているのであるから、たとえ、青年の身体発達・思考の発達・友人関係の変動を克明に記述し説明しても、その発達もつ生活関係への作用、その発達を促す生活関係の作用が動的にとらえられなければ、青年心理学とはいえない。現に一般心理学としてはすぐれた研究であっても、青年心理学的ではない論文が散見されるのである。

(b)「現代日本青年は、どのような感情を持ち、どのように考え、どのような生き方をしているのか」。これが第2の問いであり、ここでも個々の機能が対象で

はなく、生活空間全体の中に位置づけられた生態学的なものでなければならない。

進学率、就職の状況、レクリエーションの施設、政治的圧力、社会の風潮や流行、慣習や倫理など、青年をとりまく一切の客観的条件が総合力 (synergy) となって、青年の言動に影響している様相が問題となり、そこから「現代日本において」という特殊性(種)の中に青年をとらえることになる。

いうまでもなく、この特殊性は、農村青年、勤労青年、学生生徒という階層や、特定集団のメンバーとか受験生とか、非行青年というようにとらえることもできる。

ここでは、(a) で生活力と生活関係が取り上げられたように、青年期という特定の発達過程に入った青年のもつ特性〈青年性〉と、そのおかれた歴史・社会的状況性の様相によって、どのようにあらわれるか〈世代性〉とが問題とされる。

ここで特に主要な論理となるのは、「偶然性と必然性」とである。一般に、必然性とは「諸現象の時間的生起における基本的傾向」つまり必然的な連関や法則をいい、偶然性とは「諸現象における副次的なもの」である。

青年的な諸特性は人類の個体発生的な視点からいう限り、必然的な過程であり、人間の心身発達の内的構造をあらわしている。しかし、同時に、「必然性は偶然性を媒介としてのみ発現する」のであって、〈青年性〉の発現は農村と都市では違い、戦前と戦後では違う。つまり、歴史・社会的状況という偶然性によって変容する。それどころか、一家の柱であった父親を失った長男である青年は、この偶然性によって、青年期を喪失することもある。

このことから、戦後青年の特色とか、農村青年の特質など、ここで〈世代性〉と呼ぶものが産み出される。

たとえば、現代日本青年の心理的特性は、前述の生態学的観察と資料から、「自己主張が強く、実行力があり、現実的で割り切っている。享乐的で自制心に欠け権威を認めず、礼儀を知らない。非常識で反抗的である。反面、社会意識は広く順応する能力があり、頼もしい一面もある……」などといわれる(6)。

ここでもう一步心理学的な抽象を進めるに当たって、因子分析的な統計処理の方法も考えられる。しかし、実はこの因子分析に迫りこむためのバッテリーやインベントリーは、青年心理学の方法論をふまえて出されるのであり、ここでは〈青年性〉と〈世代性〉の関連が、偶然性と必然性のカテゴリーによって解明さ

れた深さに応じただけ因子は算出されているのであり、実は因子は  $F_1$ ,  $F_2$  因子であって、この  $F_1$  因子に青年心理学的な名称を与えることは、再び上述のカテゴリー論を要請しなければならないのである。

いま、前に述べた特色を抽象して、次のように五つの傾向(特質)にまとめてみる。

- ①一切の権威を否定する傾向。
- ②感覚的実感主義的な傾向。
- ③即物的現実的な傾向。
- ④知的合理化と快楽主義を含む自己中心的な傾向。
- ⑤価値方向の喪失と社会意識の混乱をとまなう無思想性の傾向。

恐らく誰が総括しても、現代日本青年の特色はこのような形をとるのではないだろうか。

問題は、〈青年性〉がどのような偶然性を媒介として〈世代性〉を形づくっているか、「青年はいつの時期でも、古い世代や権威は否定していただではないか」「いつでも、感覚的だったし、快楽主義的だったし、空虚感や絶望感を持っていたのではないか」。

つまり、これは〈世代性〉ではなくして、〈青年性〉そのものではないのかという問い、さらに、〈青年期〉と〈世代性〉は必然性と偶然性の形を常にとるのか。むしろミード (Mead, M.)<sup>[7]</sup>の示したサモア島の青年のように、〈世代性〉の強力に働く場合は、〈青年性〉そのものが変動してくるのではないか。したがって、偶然性と必然性が互いに位置を変える可能性がないのかという問い、さらにこの5傾向がもっとも正しく現世代の特質をとらえることに成功しているとしても、この五つの傾向は相互にどのような関連があり、どのような歴史・社会的状況を反映したものなのか、という問いにも、ここで答えられねばならない。

これらの問いに答えるためにも、次の第3の問いを考えてみよう。

(c)「現代日本青年はどのように生きる可能性を持っているのか。この一人の青年はどう指導すべきであるか」

ここでは、個人の発達の青年期と、個人のおかれた歴史・社会的状況性とが、つまり青年性と世代性とが統一的に〈個〉の問題としてとらえられる。

一般に、この(c)の問いは(a)(b)を常識に基づいて適用する応用問題と考えられる。しかし、この点にこそ青年心理学の方法論的特質が見出されるのであるが、(c)こ

そ青年心理学の中核なのである。

この問いの骨子は、一つの現象や傾向を（自然科学的に孤立してとらえて組み立てるのではなく）、全生活空間の中でもつ意味という観点から再構成して認識させる点である。

女子中学生の感傷性という心理を、単にその記述と説明に終始して扱うのではなく、最初から、その発生と発展と崩壊を、全生活史の中で意味づけながらとらえる。たとえば、自己防衛の機制を中核的な要素として見出すとか、感傷はロマンティズムに発展するものとデカダンスと結びつくものがあるという洞察をもって考察するときに、初めて青年心理学的な知識となるので、感情心理学的に研究する場合とは自ら違ってこななければならない。

つまり、青年の心理は、常に古いものがこわれ新しいものが生まれつつある発展の過程の中でとらえねばならず、ここで主導的に働くカテゴリーは「可能性と現実性」である。

現実性とは、本質と現象、必然性と偶然性、内的モメントと外的モメントの統一、つまりすべての側面の相互関係の総体をあらわしている。しかも、いまの現実性は次の現実性に対しては可能性としての意味を持つ。

この可能性の現実性への転化の条件を探究すること、〈青年性〉や〈世代性〉が特定の青年集団や、一人の青年の上にどのように表現されうるか、がこの問いの中に含まれた課題である。

青年の特性と、現世代の特性が理解されたことは、すぐそのまま一人の青年の心理を理解することにはならないし、ましてその青年の言動を予言する根拠にはなりえない。しかし、少なくとも彼の言動の可能性はつかんでいるのである。孤独感、反抗、性、恋愛、政治態度、宗教意識などの青年のあらゆる心理は「現に……である」として記述されるとともに、「明日は……になりうる」という可能性としてとらえられる。さらに「……になりうる」ことを条件として「現に……である」ことが現実化されているのである。具体的にいうなら、典型的・現象的に表現された青年の言動を、常に健康な側面と不健康な側面の両側から考察するということなどがその一例である。

健康—不健康という基準は価値判断に属すると拒否する人もあろうが、ここでいう健康—不健康とは道徳的なものではなく、①内的自己矛盾によって生じ、②

明確に意識され、自発性を持っており、③青年の人間形成に生産的に作用する、という基準から心理学的に判断されるものなのである。

前に述べた現代日本青年の特質としてあげた五つの傾向を、もう一度この視点から眺め(後述する青年分析的方法によって)、底に流れるものを探究すると、常に、健康な側面には〈人権意識〉が不健康な面には〈不信〉が見出されるのである(詳しくは)〔6〕。

この〈人権意識〉と〈不信〉の両側面のどちらが矛盾の支配的な側面になるかによって五つの傾向の現象的形態は非常に変わったものになりうる。つまり可能性として、現実の青年の心の中に位置づけられているのである。

マンハイム(Mannheim, K.)〔8〕の呼んだ「世代統一」の概念はこの可能性に焦点をあわせているのである。

現代日本青年の場合のように、新憲法下に育てられた健康な側面の人権意識が、社会的解体とその後の国家独占的資本主義下の社会状況の生む自己疎外が醸し出す不健康な側面の不信に圧倒されるとき、人権意識は現象形態として利己主義・感覚主義・快楽追求・反逆性という形しかとりえないのである。

必然性を持つ以上、この二つの基本的要因は容易には動かしえないとしても、現代日本の青年教育は、積極的には人権意識の育成、消極的には不信の源泉を追求させるという形をとらざるをえないであろう。

可能性と現実性というカテゴリーは、当然「それがどのような条件のもとで転化するか」という外的条件の研究と、「自我意識としてどのように転化させるか」という主観的能動性の研究とを含んでおり、この意味でも青年心理学は社会心理学的方法と臨床心理学的方法の二つの発展方向を持つのである。

## (2) 三つの問いの統一

繰り返し述べたように青年心理学の対象は全生活空間であるが、この全体を包括的に検討するために、当然、上述の(a)(b)(c)三つの問いは交互に関連させながら統一的に把握されねばならず、最後に到達した現実性は再び(a)(b)の段階に返って次の認識を深める概念や法則として働かねばならない。

先に、青年心理の特性を四つあげ、現代日本青年の傾向を五つ指摘したが、これらは現実性の内容の側面であることに注目しよう。

内容とは現実性を構成している実質の総体をあらわすカテゴリーであり、形式

は内容の存在の仕方をあらわすカテゴリーであるといわれる。

ここで青年心理の特性を形式の面からとらえるとはどういうことであろうか。

生活力は内容であり、生活関係は形式である。内容の発展が形式を規定するのであるが、逆に形式も内容に反作用し影響力を持つ。前述の青年の4特性を形式の面から認識すれば次のようにまとめる。

- ①変化の速度が急激であり、新しい未知の体験として受けとる（未構造化）。
- ②各機能間の成熟や発達が不均等で落差が生ずる（発達の不均等性）。
- ③不安や危険に対する両親や成人の保護がなく、社会的圧力や良心の批判を直接自我の問題として受ける（無被護性）。
- ④すべての矛盾が明確に意識化され、評価批判の対象として受けとられる（自覚性）。

児童心理学では[9]すでにたくさんの資料の上に、精神発達の基本的な原理が提出されている。「活動性の原理」「顕著性の原理」「自発性の原理」「構造一機能の原理」などである。もちろん、これらは、児童についてばかりでなく青年についても妥当するといえる。

しかし、いまだに青年期独特の心理現象の法則や原理が出されていないのは、単に青年心理が児童のそれよりも複雑だということにとどまらない。やはり青年心理学の方法論的な立遅れをあらわしているように思われる。ここで原理とか法則とかは、質の高い内容から規定された質の高い形式である。ホール[10]の青年心理の12範疇とかエリクソン (Erikson, E. H.) [11] のエゴ・アイデンティティ理論などの内容から、原理的なものがとらえられるのではないだろうか。

しかし、原理や法則にまで到達できない場合でも、このような形式的側面を強調することによって、青年期と児童期や成人期との異同を、より正しくとらえることができるであろうし、さらに研究を進めることによって、形式と内容との関連、形式の4特質間の関連も構造化されるであろう。このときに青年期特性の形成機構が解明されるはずである。

### 3 「形成機構」探究のための方法論

では、現段階ではどのような方向でこの形成機構の問題に取り組むべきか。

まず児童心理学で使用する概念と青年心理学のそれとを比較してみよう。

反射, 感覚, 行動の型, あそび, 怒り, 憎しみ, 道具, 言語, 賞罰, アニミズム, 親子関係, ギャング集団などと, 劣等感, 思考, 自我感情, 第2次性徴, 対人関係, 恋愛, 孤独, 不安, 社会態度, 宗教意識, 世界観, 価値意識など。

分析の単位が違っている点, その違いが, 前者は実証主義的心理学(学習理論やグループ・ダイナミックス)に還元されやすいものであり, 後者は, 現象学的心理学の特色をおびていることが明瞭であろう。

ここで, 「現象学的心理学」〔15〕とは, もっとも広い意味にとって, 個人の志向体験について, 構造を理解し, 類型を記述し, 心理現象の特質をとらえようとする心理学と解しておこう。ジェームズ(James, W.)やアドラー(Adler, A.)やユング(Jung, C. G.)をこの系譜にあげる。青年心理学はまさにこの意味で, 青年の体験を扱う現象学的心理学である。

しかし, この語を狭義にとって, 現象に限ってしまい客観的世界に対しては判断中止の態度をとる点を強調して, 統計的現象や社会学的現象に眼を閉じるとか, 無意識理論をまったく顧みないとなれば, 話はおのずと別になる。

同様のことが了解心理学にもいえる。シュブランガー〔16〕は「一つの価値全体へその構成部分として編入されるもののみが意味関連の中に立ち」「心そのものを価値実現に向けられた一つの生活組織すなわち構造と見る」ことを主張して, 自分の青年心理学を構造心理学であり類型心理学であり, 発達心理学であると主張した。

われわれも青年の全生活空間を構造関連として追体験的に了解する。この解釈学的方法に多くの共鳴を感ずる。しかし, そのために統計的方法や精神分析的方法を拒否し, 他の心理学領域や社会科学との通路を閉じてしまい, 再び, 名人芸的な直観的方法に陥る危険性に対して警戒しなければならない。

ここで了解〔17〕(Verstehen, comprehension)を単に行為をその出発のときの条件をもとにして, その結果の意味によって説明する弁証法的運動(サルトル, J. P.〔17, 157〕)としてとらえるなら初めて生産的になりうるであろう。

以上の考察をへて, われわれは青年心理学とは青年を弁証法的全体化の枠の中で〈心理学的に〉了解する教育心理学の一領域と規定しようと思う。

ここで弁証法的全体化とは, 青年の全生活空間を全体として問題化するという意味であり, 心理学的とは窮極にサイコダイナミクス(psycho-dynamics)という分

析単位に還元するという意味であり、了解とは、分析と総合・前進と遡行・客観と主体・構成的と歴史的とを統一的に認識しようと試みることである。

この前提に基づいて、具体的なアプローチには、伝統的発達心理学の方法に加えて社会心理学的方法と臨床心理学的方法とが補助的方法として導入される。事実、「現実的な調査を重ねて進む態度を欠いていたためマルクス主義は、いわば停止した弁証法」を用いることになってしまったのである〔17,105〕〔18〕。

### (1) 青年心理学での社会心理学的方法

社会の中の青年をとらえるために、ミードの文化人類学的方法やマンハイムの世代論にみられる知識社会学的方法、そしてオースベル (Ausubel, D. P.)〔19〕の社会心理学的方法などが有効である。

青年と社会との関連を、青年心理の側面から、青年の対人関係・職業選択・政治意識などとして、調査や態度測定形で追求し、この結果を、クロス集計や因子分析法などで統計的に処理していく。

この典型的な例は、古賀〔20〕や松山〔21〕佐野〔22〕諸氏の論文であり、いずれも青年を調査対象としている。その他学会で発表される多くの、非行青少年の態度測定や、青年の職業選択の調査などがあるが、しかし、これらを直ちに青年心理学研究と呼ぶわけにはいかない。

青年心理学には単に青年を調査対象とすること以外に、もう一つの条件——青年の全生活空間の中でそのことの持つ発達史的・力動的な意味が根本的に問題化されていなければならないのである。

この意味で、オースベルの著作〔9〕は社会心理学的であるとともに、完全に青年心理学なのである。ここでは、青年期を社会的な「中間的な仮の地位」(interim status)とみなし、自我関与の勾配を抱き、パーソナリティの再構成の時期であると強調した。

社会の変動によって青年期が長びく問題や階層・仲間集団の動き、集団意識の変容、都市の解体への反応として生ずる不適応行動や非行などの諸問題の発生などをとらえ、結論として、社会的衛生 (Social Hygiene) という概念によって、社会的な安定を与えるべきであると説いている。

この場合にく社会」という語を対人関係、集団、階層という次元でとらえるか、さらに一步進めて歴史状況という次元でとらえるかによって、実はまったく別種